

県育成オリジナル品種「さぬきエンジェルスイート」 の高品質安定生産による高級ブランド化を目指して

■ J A香川県善通寺地区キウイフルーツ部会 ■

（中讃農業改良普及センター 小野壮一郎）

●対象の概要

J A香川県善通寺地区キウイフルーツ部会は、善通寺市の吉原地区と上郷地区を中心に35名の生産者が約10haのキウイフルーツを栽培し、県内一の産地を築いている。栽培品種は「香緑」や「さぬきゴールド」など県育成オリジナル品種が全体の約70%を占めている。

また、品種毎に糖度別の園地区分に取り組み、一定の品質基準を満たした果実は「さぬき讚フルーツ」のブランド名で主に京阪神市場に出荷され、連年安定して高い評価を得ている。

●課題を取り上げた理由

「さぬきエンジェルスイート」は、平成 25年 7月に品種登録された県オリジナルキウイフルーツである。平成 23年度に現地適応性調査のため初導入された後、現在5名の部会員が約1haの園地で栽培に取り組んでいる。同品種は、種子周辺の赤褐色の果肉部が天使のリングをイメージさせるとともに、糖度が高く非常に食味が良いことから、事前の市場調査においても高い商品性があると期待されている。



「さぬきエンジェルスイート」

しかし、出荷時に厳密な選別を行って出荷しているにも関わらず、カメムシによる吸汁被害や果実軟腐病の発生により、市場流通段階で果

実軟化が発生する等、安定した生産出荷を行う上での障害が生じていた。

そのため、「さぬきエンジェルスイート」の定着と県ブランド製品としての安定した市場出荷を図るため、品種特性に適した栽培管理対策を早期に構築する必要があった。

●普及活動の経過

1 適地適作の推進と個別技術指導の実施

「さぬきエンジェルスイート」は、同産地に普及が進んだ「香緑」、「さぬきゴールド」より樹勢が弱く、発芽・開花期が早い等の特徴があり、高品質果実の安定生産のためには栽培適地がより限定されると想定された。そのため、植栽を推進するに当たっては、高糖度の果実が生産できると見込まれる条件の良い園地への植栽を原則とするとともに、ある程度品種特性を理解して作りこなす技術を持った生産者を対象にして取り組むことを勧めた。

また部会全体を対象とした集団指導による講習会等とは別に、同品種を導入した部会員のみを対象にした講習会や園地巡回指導を行うことにより、品種特有の新梢管理や摘果等の栽培技術の習得と普及促進を図った。

2 関係機関と連携した病害虫防除対策の検討

平成26から28年度にかけて、関係機関（農業試験場府中果樹研究所、病害虫防除所、農業経営課、J A香川県西部果樹振興センター）の協力を得て、カメムシと果実軟腐病の効果的な防除法について、以下の現地実証ほを設けて効果的な防除対策を検討した。

1) カメムシ誘引フェロモンによる発生予察

カメムシ被害防止対策として、予察用フェロモントラップを園地に設置し、5月末から10月まで1週間おきに誘殺状況を調査した。

2) 果実軟腐病防除対策の現地実証

果実軟腐病防除対策として、病原菌により安定

して効果が見込まれる薬剤を組み込んだ新規防除体系による防除法とともに袋かけによる耕種的防除と併せた防除法について検討し、同品種に適した防除対策の構築を図った。

3 出荷市場への情報提供による販売対策支援

「さぬきエンジェルスイート」は、追熟処理した果実の日持ちが「さぬきゴールド」より長いが「香緑」に比べてやや短いことから、取扱市場に対して果実特性に関する情報提供を行い、小売店での販売時期設定等の事前調整を支援した。

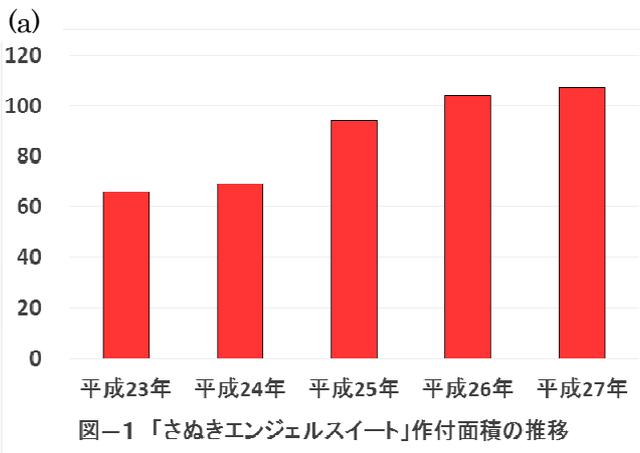


取扱市場関係者へ品種特性を説明

●普及活動の成果

1 作付面積の拡大

品種に適した栽培管理技術が認知されてくるに従い、当初導入した生産者自身の規模拡大や技術習得に熱意のある担い手による新規導入が徐々に進み、作付面積の拡大につながった(図1)。



2 現地で簡易に防除適期を把握

フェロモントラップの利用によりカメムシの発生状況が確認できたことから、発生予察の調査結果を直ちに「さぬきエンジェルスイート」生産

者に周知することにより、適期防除が可能となった(図2)。

3 果実軟化防止対策の構築

新たな試験薬剤防除体系により、果実軟腐病が抑えられ、無袋果実においても有効な防除が可能であることが確認できた(表1)。また、効果確認された薬剤は次年度の防除暦に反映されることとなった。

こうした取り組みの結果、平成28年産市場出荷(約8t見込:前年産3.5t)は順調に進み、平成25年の初出荷から前年産までに多かった軟化のクレームはほとんど寄せられなかった。

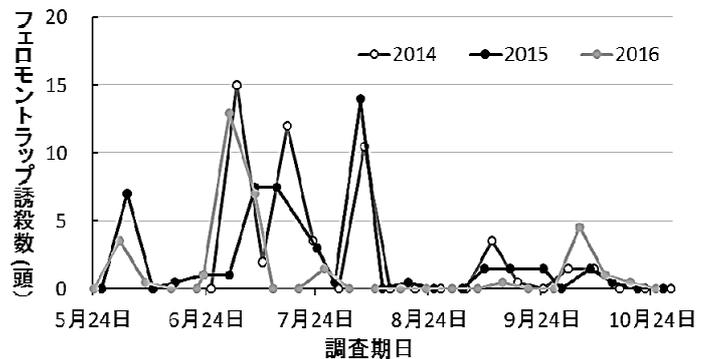


図-2 カメシ発生予察園地での年次別誘殺消長(2園地平均)

表-1 薬剤防除体系と果実袋有無の違いが果実に及ぼす影響(平成28年)

防除体系	果実袋	調査果実数	※軟腐発生果実数(累積:11月14~30日)			発生率
			側面	果頂部	発生率	
試験薬剤防除区	有	40	21	0	52.5%	40.0%
	無	40	11	0	27.5%	
慣行薬剤防除区	有	40	29	1	75.0%	72.5%
	無	40	28	0	70.0%	

※同心円状の水浸斑が発生した果実を軟腐発生としてカウントした。

●今後の普及活動の課題

1 植栽樹齢に適した着果調整の適正化

初結果時に着果が多いと樹勢への影響が生じることが判明したため、樹齢に応じた着果数の調整を行う必要がある。

2 更なる生産出荷販売の安定化の推進

「さぬきゴールド」と「香緑」の間の11月に出荷が見込まれ、県産オリジナルキウイのリリース販売につながることから、今後も安定した出荷・流通・販売が行えるよう、適地への栽培面積拡大を推進するとともに、適正な栽培管理技術の定着化を支援する。